

¹◎ これまでの経過

李光洙の初期文学活動は「翻訳」と深いかわりを持っている。筆者は 2014 年に書いた「李光洙と翻訳—Uncle Tom's Cabin を中心に—」という論文で、李光洙の初期の文章を「翻訳」という側面から再照明した²。李光洙が明治学院在学中だった 1908 年に発表した「血涙」³と、1910 年春に発表した「어린 犠牲 (幼い犠牲)」⁴はともに映画からの「翻訳」であり、1913 年に新文館から刊行した『검둥의 설음 (黒ん坊の悲しみ)』は日本語を経由した『Uncle Tom's Cabin』の「翻訳」だった⁵。このあと大陸放浪に出た李光洙は、1914 年に朴趾源の『熱河日記』の一部の「翻訳」である「떡적골 가난방이로 한 세상을 들먹들먹한 허생원 (墨積洞の貧乏両班として世間を驚かした許生員)」を『아이들 보이 (子どもよ、ごらん)』⁶に発表し、のちにこれを発展させて散文詩「許生伝」(1915)と長編『許生伝』(1923)を書く。朝鮮で近代的文体がまだ確立していない時期に「翻訳」は李光洙が朝鮮語の表現力を養うための強力なツールとなったのである。

この論文を書く過程で李光洙の初期作品を整理した筆者は、ある疑問をもった。この時期の李光洙は小説を基本的に国漢文で書いている。新文館から刊行した『검둥의 설음』と『아이들 보이』に発表した許生員の話は崔南善の方針にそってハングル文で書き、ロシアに滞在中は現地の事情のために論説までもハングル文で書いたが、帰国すると国漢文に復帰し、東京に再留学してから書いた小説はすべて国漢文である。それなのに一九一七年の『無情』だけが例外的に純ハングル小説なのである。金榮敏はその著作で『無情』はもともと国漢文で書かれたと述べているが⁷、その主張が正しいのではないかと筆者は考えた。そこで前掲論文「李光洙と翻訳」の「おわりに代えて—『無情』の表記問題—」でそれに言及し、李光洙が意識的にハングルで小説創作を始めたのは上海亡命から帰ってからのことで

¹ 本稿は『『無情』から「嘉実」へ—上海体験を越えて—』（『朝鮮学報』No. 250/251、2019. 1 掲載予定）の前半を人文評論研究会発表レジュメに改変したものである。

本研究は日本学術振興会科学研究費基盤研究 (C) 16K02605 の助成を受けている。

新聞、雑誌、長編小説タイトルを『』で、短編小説タイトルを「」で表示した。

一九六二～六三年に刊行された三中堂『李光洙全集』を使用した。

² 波田野節子「李光洙と翻訳」『東京大学 韓国朝鮮文化研究』第一三号、二〇一四、一～二一。「翻訳」の英訳は「translation」であるが、当該論文で筆者は「翻訳」という語を以下のように定義した。「翻訳」という語を用いたのは、「trans-late」という語が、本来、境界を越えてあるものを別の場所に運んだり、別の形に置き換えることを意味するところから、映像の内容を言語に置き換える行為を「translation=翻訳」の一種とみなしてのことであり、「翻案」の意味まで含んでいる」（三頁）。本稿もその定義にしたがう。

³ 『太極学報』第二六号、一九〇八年十一月

⁴ 『少年』一九一〇年五月号、六月号、八月号

⁵ この論文で筆者は、『검둥의 설음』が堺枯川の『家庭夜話第三冊 仁慈博愛の話』と百島冷泉の『文庫第二編 奴隷トム』の二作品を独自の方法で組み合わせたものであることを明らかにした。

⁶ 『아이들 보이』一〇号、一九一四年六月

⁷ 『韓国近代小説史』卷、一九九七、四四六～四五一頁／『韓国近代小説の形成過程』소명출판、二〇〇五、一六八～一七二頁。ただし金榮敏は『韓国近代小説史』でハングル表記は『毎日申報』の読者層を意識した李光洙の自覚的な選択だったとしており、『韓国近代小説의 形成過程』でもその見解は変わっていない。

あろうと推論して論を結んだ⁸。

翌 15 年、筆者は『『無情』の表記と文体について』を書いて本格的にこの問題に取り組んだ⁹。そして、国漢文で書かれた原稿の漢字を掲載直前にハングルに変更することを決めたのは、大衆読者が国漢文小説を忌避することを恐れた『毎日申報』の編集責任者、中村健太郎であろうと推論し、第三者によって勝手に表記を変えられたにもかかわらず読者が問題なく『無情』読むことができたのは、その文体がすでに近代的なレベルに達していたからだ¹⁰と論じた。そのさい、国漢文で書かれた前半部とハングルで書かれた後半部の文体の比較は今後の課題であるとした。1919 年に上海に亡命した李光洙は、二年後に朝鮮にもどりハングル小説「嘉実」を執筆する。そして 1923 年に出した『春園短篇小説集』（興文堂）の序文で、「嘉実」は「できるだけやさしく、諺文がわかる人なら誰でも読めるように、読む人の声を聞いただけでわかるように、そして教育を受けてない人にでも理解できるように、それでいて読者に道徳的に害を与えないように書こう」¹¹という「新しい試み」だったとして、自分はこれからもこの態度で書く¹²と宣言した。筆者はこれを根拠として、「嘉実」こそ李光洙が意識的に書いた最初のハングル小説であり、民衆とともにいることを選んで上海からもどった李光洙は国漢文を読めない彼らのために小説の表記をハングルに変えたのだと述べた。

これに対して金榮敏は 2017 年に「韓国近代文体の形成過程—李光洙の文章の言文一致と口語体小説の定着—」を発表した¹¹。1926 年の『젊은 꿈(若い夢)』にいたるまでの李光洙の初期文体の変遷を整理したこの論文のなかで、金榮敏は『無情』の表記変更を決定したのは李光洙自身であると主張し¹²、李光洙がいう「新しい試み」が意味するものは、単にハングルで小説を書くことではなく、「純粹の朝鮮語の語彙をもちいた口語体のハングル小説を書くこと」であり、「嘉実」において李光洙は初めて満足できる水準の言文一致に到達したのだと述べた。筆者はこの論文から大きな触発を受けた。しかし同時に、ここに李光洙の上海亡命体験が言及されていないことを物足りなく思った。李光洙は朝鮮の近代的文体の確立について誰よりも早く、誰よりも大きな関心をいだいてその発展に献身した作家であるが、それと同時に朝鮮民族の独立運動に邁進し、「朝鮮青年独立団独立宣言書」を起草して上海に亡命した民族主義者でもある。李光洙にとって文学活動と民族運動の二つは切り離せないものだった。上海亡命から帰ったあとで李光洙の文体が変わったことには必ずや上

⁸ 前掲「李光洙と翻訳」、一四頁

⁹ 波田野節子『『無情』の表記と文体について』『朝鮮学報』二三六輯、二〇一五、一～二八頁

¹⁰ 原文は朝鮮語。日本語訳は筆者による。(以下同じ)

¹¹ 金榮敏「韓国近代文体의 形成過程」『現代小説研究』第二六号、二〇一七、三九～七七頁

¹² その根拠として金榮敏は、一九一七年一月一日の「社告」がもっとも信頼度が高い一次資料であることと、一九三〇年一月の「作家として見た文壇の十年」（『別乾坤』）の記述を挙げている。しかし一九一七年夏に『京城日報』に連載された『五道踏破旅行記』の最初の五回が李光洙の名前を使って新聞社の人間が書いたものであったのを見れば、新聞社の倫理意識は低く「社告」の信頼度も高くはない。(波田野節子「일본어판「오도답과여행」을 쓴 것은 누구인가」『尚虚学报』四二、二〇一四参照) また後者については、その表現があいまいであることを波田野は前掲『『無情』の表記と文体について』で指摘した。(一一頁)

海での経験が関わっていたはずである。本稿は、このような問題意識を出発点としている¹³。

本稿ではまず、筆者が以前「今後の課題」としておいた『無情』の前半と後半の文章を比較する。1916年12月、李光洙は『無情』の前半を国漢文で書いてその原稿を『毎日申報』に送った。だが12月29日付広告と1月1日付謝罪文が示すように、表記はとつぜん変更された。連載がはじまったあと李光洙は、後半を今度はハングル文で書いた。その痕跡はかならずやテキストに残されているはずである。そこで第一章でテキストの前半と後半を比較して変更の痕跡を探し、表記変更の事実性を検証する。【つぎに第二章で、上海での李光洙の活動を考察し、彼がどのような経緯をへて「新しい試み」をすることになったのかを探ることにする。】

◎『無情』前半と後半の比較

筆者は『無情』を数年かけて翻訳し2005年に刊行したが¹⁴、作業が後半に入ったとき、なんとなく文体が新しくなったという感触を抱いたことを記憶している。当時は『無情』の前半が国漢文で書かれ後半がハングルで書かれたなど想像もしていなかったので、長編小説を書いているうちに文章力が向上したのだろうと単純に考え、ノートを取っていなかったことが悔やまれる。李光洙は1910年に書いた論説「今日の我韓用文について」¹⁵で、固有語で書けないものだけを漢字語で書くことを提唱し、その後文章修練をつづけた。その結果、『無情』の文体は第三者が漢字をハングルに直しても違和感なく読むことができるだけの文章レベルに達しており、会話や行動を述べる部分においては、前半と後半のテキストに文体の差はほとんど見られない。そこで以下では、目的物を正確に写しだすために多様な語彙と言いまわしが必要とされる描写文、および漢字語が多く使用される論説調の文章をいくつか取り上げ、比較してみる。比較するテキストは多いに越したことはないが、紙数の問題もあり、筆者が翻訳しているとき特に印象に残ったテキストに限定した。

テキストは初出の『毎日申報』連載本から取り、訳文は平凡社本の拙訳を用いる。一部意訳も混じっていることをお断りしておく。平凡社本の底本は1925年に興文堂から発行された『無情』第六版で、新聞連載本とわずかだが異同がある。新聞連載本には句点がなく分かち書きもほとんどされていないが、読みやすさを考慮して句点を加え、分かち書きした。括弧番号と傍線は筆者がつけたものである。またパソコンソフトの制約のためアレアと二重子音は現代表記する。

¹³ こう考えていたときに『歴史評論』の編集部から二〇一九年三月号の三・一運動特集に〈李光洙の独立運動経験と活動〉をテーマに論文を執筆するよう依頼され、「李光洙のハングル創作と3・1運動」という論文を書いた。それにより上海体験が李光洙の文体変化と関わることを確認することができ、これが本稿執筆への大きな弾みとなった。こうした執筆事情のために、本稿と当該論文とは一部重なる部分があることをお断りしておく。

¹⁴ 大村益夫・布袋敏博編、朝鮮近代文学選集第一巻『無情』平凡社、二〇〇五

¹⁵ 「今日我韓用文에 對하야」『皇城新聞』一九一〇年七月二四日、二六日、二七日

(一) 描写文に残らない痕跡

ここでは人物描写の文章を前半と後半から各一カ所、風景描写の文章を前半から一カ所、後半から二カ所取り上げて比較する。

まず前半の(1)第三回で亨植がはじめて善馨と出会う場面である。じつは筆者は翻訳時に、この部分を訳しながら描写が古くさいと感じたのを覚えている。

(1) 고개를 숙였으며 눈은 보이지 아니하나 난대로 내어바린 감은 눈섭이 하얗고 넓죽한 니마에 뒤러이 춘산을 그리고 기름도 아니마른 감한 머리는 언제나 비섯는가 허트러진 두어 올이가 불그레 복송아꽃 갓흔 두 뺨을 가리어 바람이 부는대로 하느적く 꼭 다문 입술을 따리고 (後略) (『毎日申報』一九一七年一月五日)

うつむいているので瞳は見えないが、自然のままの黒い眉が白く大きな額にくっきりと春山を描き、油も塗らぬ黒髪はいつ櫛を入れたのやら、ほつれ髪が二筋、三筋、桃の花のようにほんのり赤い両頬にかかって、風が吹くたびにゆらりゆらりと固く結んだ唇を打つ。
(拙訳、一二頁)

いかにも美人を描くステレオタイプの文章で、善馨という人物の内面をうかがわせる要素は見あたらない。善馨の性格は前半では曖昧であり、後半に行くにしたがって明確になってくる。おそらく作者自身がまだ善馨の性格を設定しえておらず、それがこの描写につながったのだろう¹⁶。この文章は「春山」以外は固有語で書かれていることがかえって古小説のような趣きを感じさせる。漢字語を使わずに固有語で書くことと、その文章が旧式か近代的かは別の次元の問題であることがわかる。

これとは逆に、後半の(2)第七三回の冒頭にある下宿の老婆の上半身の描写は力強く新鮮で、翻訳しながら驚いた記憶がある。京城学校で学生の嘲笑を受けた亨植が下宿にもどると、老婆が縁側で煙草を吸っている。

(2) 형식은 정신업시 집에 돌아왔다. 로파가 옷통을 벗고 마루에 안져서 담배를 먹는다. 억개와 팔구비에 뼈가 울룩불룩 나오고 주름잡힌 두 것이 말라붓흔드시 가삼에 착 달라 붓혔다. 귀밧호로 흘러나리는 두어줄기 땀이 마치 그의 살이 썩어서 흐르는 송장물갓흔 값각을 준다. 반이나 세고 몇오리 안이남은 머리터럭과 주름잡히고 움속 들어간 두 뺨과 뜨거운 벧혜 시들은 풀넛과 갓흔 그 살과 허리를 굽으리고 담배를 먹는 그 모양 사람에게 말할수업는 슬픔을 준다. (『毎日申報』一九一七年四月七日)

亨植は茫然自失したまま家に帰ってきた。板間で婆さんが肌脱ぎになって煙草を吸って

¹⁶ 筆者は以前の論文で、前半の善馨の描写は「抽象的で力を欠いている」と述べ、その理由をモデルである許英肅という人物の性格をまだよく把握できていなかったせいではないかと述べたことがある。拙稿「体験と創作のあいだ—『無情』の再読(下)—」『韓国近代作家たちの日本留学』白帝社、二〇一三、一一一頁

いる。肩と肘の骨がくっきりと浮き出し、しなびた二つの乳房が乾いてひつついたように胸にぶら下がっている。耳もとを流れる二筋の汗は、まるで彼女の肉が腐って分泌する体液のような感覚を与える。半白髪で大して残っていない頭髪、皺くちやの窪んだ頬、熱い陽ざしで萎れた草を思わせる肌、腰をかがめて煙草を吸っている彼女の姿は、見るものに言い知れぬ悲しみを与える。(拙訳、二五三頁)

老婆はいまではすっかり年を取り、息子にも先立たれたが、それでも病気になれば薬を飲み、寒ければ綿入れを着てまだまだ長生きをするつもりだ。なぜ生きるのかなどは考えもせず、煙草を吸うのを楽しみにたくましく生きている老婆の描写は、個人をこえて人間全体の人生を考えさせるインパクトを持っている。この文章は、「감각」「정신」「로파」というほぼ固有語化した漢字語のほかは固有語だけで成り立っている。のちに「嘉実」を書くとき、李光洙は意識的に文章全体を「耳で聞いてわかるように」固有語だけを用いるが、その試みはすでに『無情』で行なわれ、このように高いレベルに達していたのである。

これが第七三回の冒頭であることにも留意する必要がある。一九一六年の末に新聞社から新年小説を書けという依頼電報を受けとった李光洙は、冬休みに不眠不休で約七〇回分の原稿を書いて送ったことを回想している。筆者は以前『無情』を分析し、一気呵成に書いた約七〇回は、小説の流れから見て、亨植が教師をやめる決意をして京城学校を出ていく第七二回までであろうと推論した¹⁷。つまり、この第七三回はハングルで書きはじめた最初の回である可能性が高い。『無情』は六月一四日の第一二六回まで続いた。第七三回の掲載は四月七日である。後半をハングルで書きはじめた李光洙には、前半を執筆したときと違って時間の余裕があった。冒頭の老婆の描写にはとりわけ念を入れたのではないかと思われる。

それでは次に風景描写の例を見よう。前半の(3)第六五回で描かれる水墨画のような夜の連山、そして後半の(4)第七八回のソウルの夕暮れ風景と(5)第一一九回の三浪津の大洪水の描写の三つを見ることにする。

まず(3)は前半なので国漢文で書かれたはずだが、それにもかかわらず固有語が駆使されていて後半の(4)(5)の風景描写文との差を感じさせない。

(3) (前略) 황해도련산(黃海道連山)을 보았다. 산들은 물먹으로 그린 묵화 모양으로 골짜기도 업고 나무나 돌도 업고 모다 한빛으로 보인다. 달빛과 밤빛과 구름빛을 합하여 크다란 붓으로 조희우혜 형세조케 그린 그림과 갓다 하얏다. (『毎日申報』一九一七年三月二五日)

(前略) 黄海道の連山を見た。山々は墨で描いた水墨画のように、谷もなく、木や石もなく、すべてが一色に見える。月の色と夜の色と雲の色を混ぜ合わせて、紙の上に巨大な筆でみごとに描いた絵のようだ。(拙訳、二二八頁)

¹⁷ 『『無情』を読む(中)』『李光洙・『無情』の研究』二〇〇八、白帝社、三〇九頁 初出は1994『朝鮮学報』No. 152

夜汽車の窓からこの水墨画のような夜景を見ているうちに、亨植の心は同じように混沌とした状態に入っていく。そして天地創造の幻影を見ながら、他の何物ともちがう自分だけの生命がこの宇宙に存在することに目覚めるのである。

ここには「묵화(墨絵)」「합하다(合わせる)」「형세(形勢)」などの平易な漢字語しか使われていない。また初出では「황해도련산(黃海道連山)」だったのが単行本では「황해도의련산(連山)」に、「물먹으로」だったのが「슈묵(水墨)으로」に変えてある。前者は地名の漢字をハングルに変えたものだが、後者は逆に漢字語を復活させている。おそらく「물먹」という語を使ったものの、見馴れない固有語よりも「水墨」というよく使われる漢字語の方が適切だと判断したのだろう。試行錯誤をうかがわせる変更である¹⁸。

次に後半の(4)第七八回、亨植が金長老の家の夕食に招かれた日のソウルの夕暮れの風景描写を見よう。

(4) 남산 솔수풀 우에 살짝 덩헛던 석양도 무엇으로 지우는 드시 점々 슬어지고 그 무성한 가지와 님사귀 속으로 자지빋떡인 황혼이 거뒀줄 모양으로 아슬랑아슬랑 기어나온다. /해박휘는 인왕산 머리에서 뚝 떨어졌다. 북악산에 아즉도 곳갈 모양으로 석양이 남았다. 당안 만호에는 파르족々한 장막이 덩힌다. 그 한끗히 늘어나서 북악산으로 덩혀올라간다. 참마내¹⁹ 그 곳갈까지도 파라케 물을 들이고 말았다. (『毎日申報』一九一七年四月一三日)

南山の松林の上にかかっていた夕陽も何かで消されるようにしだいに消えていき、茂った枝と葉のあいだから、紫色を帯びた黄昏の光が、蜘蛛の巣のようにそろそろと這い出してくる。/日輪が仁旺山の頂上に沈んだ。北岳山には、姉さんかぶりの手拭いのような夕陽がまだ残っている。ソウル数万戸の上空に青ずんだ天幕がかかる。天幕の一方の端が北岳山をおおうように登っていき、とうとう手拭いも青く染まった。(拙訳、二七五頁)

地名は最初からハングルで表記されている。漢字語は「무성하다(茂る)」「황혼(たそがれ)」「장막(とぼり)」など平易で固有語に近いものばかりである。雄大な自然の夕暮れの描写からその下に広がるソウル市街、夜が来てにぎわう庶民たちの生活、そして安洞の金長老の家へと焦点がしばられていき、そこに善馨がオルガンを弾いて歌う効果音に加わって、いよいよ婚約話が始まる。まるで映画の手法のようだ。風景描写がストーリーの展開と密接に関わっていることがわかる。

最後に(5)後半の第一一九回、三浪津の大洪水の描写を見よう。李光洙が渾身の力を込

¹⁸ よく使われる語への修正は七一回の人名の変更にも見ることができる。連載本では「柳下恵」だったのを単行本で「伯夷叔齊」に直してあるのは、正道を守った聖人としてこちらの方が人口に膾炙しているからであろう。また内容にかかわる修正としては、一七回、二五回、四一回における英采の純潔に関する記述修正がある。波田野節子『『無情』を読む(上)』『李光洙・『無情』の研究』白帝社、二〇〇八、二三〇頁、註五

¹⁹単行本では「마참내」に修正されている。

めたと思われる大自然の描写は圧巻である。

(5) 과연 대단한 물이로다. 좌우편 산을 남겨 노코는 원통 깃벌건 흙물이로다. 강 한가운데로 금실々々 소용도리를 처가며 흘러나려가는 물소리가 들리는 [듯]²⁰하고 그 물들이 좌우편에 늘어선 산구비를 파서 얼마^ㄷ안되면 그 산들의 밋히 빠져나갈 것 같다. [中略]하날우이며 땅밋치 원통 물세상이로다. 이 물세상에 서서 사람들은 「엇지 되랴는고」 하고 하날만 우러러본다. (『毎日申報』一九一七年六月三日)

はたして、ものすごい水である。左右の山を残してあとはすべてが赤黒い泥水だ。川の真ん中でうねりながら渦を巻いて流れる水の音が聞こえるようである。その水が左右に並んだ山角^{うづ}を穿つので、いまにも山裾が崩れ落ちてきそうだ。[中略]天の上も地の下も、すべてが水の世界である。この水の世界に立って人びとは「どうなるのだろう」と天を仰ぐばかりだ。(拙訳、四一八～四一九頁)

漢字語は「과연 (はたして)」「대단하다(ものすごい)」「좌우편 (左右)」「세상 (世界)」などほとんど固有語化したものしか使われていない。大自然の驚異をまのあたりにした亨植たち一行の心には、このとき個人を越えた「共通の思い」が湧くが、それはこのあと妊婦の看病や慈善音楽会を開くなかで強まり、ついに各自が民族への奉仕を宣言する場面へとつながっていく。ここでも風景描写はストーリー展開に重要な機能を果たしている。

以上、二つの人物描写と三つの自然描写を見てきた。新聞連載時には漢字だった地名が単行本でハングルにされていたり、「물떡」から「슈목」への修正のような試行錯誤の痕跡はあったが、前半と後半にかかわらず固有語とほぼ固有語化した漢字語しか用いられておらず、李光洙の描写文がこの時点で、一九一〇年の「今日我韓用文에 對하야」で主張した文体に到達していたことを示している。とはいえ(1)の例が示すように、固有語の使用がむしろ陳腐さを際立たせることもあり、漢字語の不使用と文学的な価値とが必ずしも一致するわけではないこともわかった。(2)の例のように老婆の上半身の写実によってその人物の生き方までを暗示するような描写や、ストーリーの展開と有機的に結びついた(3)(4)(5)のような風景描写には、表記や文体とは違った次元で『無情』の近代性と文学性が現れている。

(二) 論説調の文章に残る痕跡

啓蒙小説である『無情』には論説をそのまま小説にはめこんだような文章が出てくる。それらは本来なら国漢文で書かれるべきものが、小説であるためにハングル文で書かれているというぎこちない印象を与える。そうした部分に痕跡が残っているかを見てみよう。ここでは前半の(6)第五三回、後半の(7)第一一〇回と(8)第一一九回を取り上げて比べてみる。まず、英采の遺書を読んだ亨植が女性の純潔について哲学的な思索にふける(6)

²⁰ 単行本で [듯] が挿入されている。

前半の五三回から少し長めに引用する。

(6) 사 램의 생 명(生命)의 발 현(發現)은 다 종다 양(多種多様)하 니 혹 충(忠)도 되 고 효(孝)도 되 고 정 절(貞節)도 되 고 기 타 무 수무 한(無數無限)한 인 사 현 상(人事現象)이 되는 것 이 라. 그 중 에 무 릫 민 족(民族)을 따 라 혹 은 국 정(國情)을 따 르 고 혹 은 시 대(時代)를 따 라 필 요 상 이 무 수무 궁(無數無窮)한 인 사 현 상 중(人事現象中)에 서 특 종(特種)한 것 일 개(一個)나 또 는 수 개(數個)를 취 하 야 만 반 인 사 행 위(萬般人事行爲)의 중 심(中心)을 삼 으 니 차 소 위(此所謂)도(道)요 덕(德)이 오 법(法)이 오 른(律)이 라. [中略] 생 명은 하 여(何如)한 도 덕 법 률(道德法律)보 다 도 (偉大)한 것 이 라. 그 림 으 로 생 명(生命)은 절 대(絶對)요 도 덕 법 률(道德法律)은 상 대(相對)니 생 명(生命)은 무 수 히 현 시(現時)의 그 것 과 상 이(相異)한 도 덕(道德)과 법 률(法律)을 조 출(造出)할 수 잇 는 것 이 라. (『每日申報』一九一七年三月八日)

人間の生命は多種多様な形で発現する。あるいは忠、あるいは孝、あるいは貞節となって、人間世界もろもろの無数無限の現象として現われる。たいがいの場合、それら無数の現象のなかから民族、国情、あるいは時代に応じて必要とされる特殊な一個または数個が取りだされて、すべての人間行為の中心に据えられる。これがいわゆる「道」であり、「徳」であり、「法」であり、「律」である。[中略] 生命はいかなる道徳や法律よりも偉大なものだ。生命は絶対的であり、道徳と法律は相対的である。生命は、現在あるものとは違う道徳と法律をいくらでも創り出すことができるのだ。

この文章には国漢文で書かれた痕跡がはっきりと残っている。傍線を引いた語彙「차 소 위(此所謂) 이것이いわゆる」「하 여(何如)한(いかなる)」「조 출(造出)하 다(創り出す)」などの漢字語は、視覚的に意味が通じるので国漢文にはよく用いられるが、音読すると意味が通じないのでハングル文では用いられない語彙である。これらが使われていることは、この文章が国漢文で書かれ、あとになってハングル表記に変えられたことを示している。

また、ハングルだけでは意味伝達が困難な漢字語にはその後ろに括弧でくくった漢字を表示してあるが、同じ単語が出てきたときは表示しないのが普通なのに、ここでは何度も繰り返して表示されている。これはハングル表記に変える作業を行なった人間が内容を考えることなく自動的に作業したためではないかと推測される。ただ、単行本にしたときに李光洙がなぜ直さなかったのかという疑問は残る。

それに比べて、後半の(7)第一一〇回と(8)第一一五回ではそのような語彙は使われていない。漢字語の使用頻度が低くなっていて、()による漢字表示も少ないうえ、重複して表示されることもない。何よりも論説調をかなり脱している。

(7) 형식은 엄정한 일부々々주의 「一夫一婦主義」²¹를 고집하고 우선은 첩을 엇던지 기생 외입을 하는 것은 결코 남자의 잘하는²² 일이 안이라 한다. 과연 우선으로 보면 첩이나 기생이 안이고는 오랜 일생을 지낼 것 갖지 하이하다. 우선의 일부다쳐주의나 형식의 일부주의가²³ 반면은 각々 이전 조선도덕과 서양예수교도덕에서 나왔다고 하더라도 반면은 확실히 각々 자귀네의 경우에서 나온 것이다. (『每日申報』一九一七年五月二三日)

亨植は厳正な一夫一婦主義を主張して譲らず、友善は畜妾や妓生遊びは男として間違った行為ではないと言う。友善にしてみれば、妾や妓生なしでは、長い人生を過ごしようがないのである。友善の一夫多妻主義と亨植の一夫一婦主義は、それぞれ昔の朝鮮道徳と西洋のキリスト教道徳から出てきたものであるが、もう一面では、間違いなく各自の置かれた立場から出てきたものである。(拙訳、三八九～三九〇頁)

漢字表示があるのは、最初に出てくる「일부々々주의(一夫一婦主義)」のみで、「일부다쳐주의(一夫多妻主義)」「조선도덕(朝鮮道徳)」「서양예수교도덕(西洋キリスト教道徳)」のような漢字語もみなハングルで表記されている。ほかに使われている漢字語は「엄정하다(厳正だ)」「고집하다(頑固だ)」「첩(妾)」「기생(妓生)」「남자(男)」「과연(はたして)」「일생(一生)」「각々(それぞれ)」「이전(以前)」「반면(半面)」「확실히(確かに)」「경우(場合)」などで、「厳正だ」以外はほぼ固有語化している。

次の(8)においてもそれは変わらない。(6)と同じく亨植の思索を述べているが、ハングルだけで表記されてもさほど問題なく理解できる。

(8) 그는 그의 동포가 사랑을 작란으로 녀이고 희롱으로 녀어난 태도에 대하여 큰 불만을 품는다. 자귀의 일시 정욕을 만족하기 위하여 이성(異性)을 사랑한다 함을 큰 죄악으로 녀인다. 그는 사랑이란 것을 인류의 모든 정신작용중에 가장 중하고 거룩한 것의 하나인 줄을 맞는다. 그럼으로 자귀가 선형을 사랑하는것은 자귀에게 대하여서는 극히 뜻이 깊고 거룩한 일이오 자귀의 동포에게 대하여서는 큰 정신덕 혁명으로 생학한다. (『每日申報』一九一七年五月三〇日)

彼は自分の同胞が愛を遊びや戯弄とみなす態度について、大きな不満を持っている。自分の一時的な情欲を満足させるために異性を愛することを、大きな罪惡だと見なしている。彼は、愛というものが人類のすべての精神作用のなかで、もっとも重大でもっとも神聖なものの一つであると信じている。だから善馨に対する自分の愛は、自分にとってはきわめて意味深く神聖なものだし、自分の同胞にとっては精神的な大革命だと考えている。(拙訳、四〇六頁)

²¹ 単行本で () に修正されている。

²² 単行本で 「못하는」 に修正されている。

²³ 単行本で 「일부일부주의가」 に修正されている。

「異性」という「異姓」や「理性」と間違えそうな単語にだけ漢字が表示され、「일시 정욕을 만족하기 (一時の情欲を満足させる)」、「정신작용 (精神作用)」、「큰 정신혁 혁명 (精神的な大革命)」などの難しい語句もハングル表記しかされてない。また「동포 (同胞)」、「희롱 (戲弄)」、「태도 (態度)」、「불만 (不満)」、「죄악 (罪惡)」、「중하다 (重大だ)」、「극히(きわめて)」などの平易な漢字語は使用頻度が高くほぼ固有語化している。

前半の(6)と後半の(7)(8)を比べてみると、後半の方がずっとわかりやすい文章になっている。(6)では国漢文特有の語彙が使われているために漢字をハングルに書き直すと意味伝達が難しくなり、括弧表示の漢字が多すぎるなどの問題を引き起こしているが、(7)(8)は最初からハングル文で書かれたために、そうした問題を避けることができたと考えられる。ロシア滞在時には論説もハングルで書くという体験をしていた李光洙にとって、このような工夫はさほど難しいことではなかったであろう。

以上、『無情』の前半と後半を比較検討してみた。描写文において表記変更の痕跡はあまり見られなかったが、漢字語が多く使用される論説調の文章には国漢文で書かれた痕跡が残っていた。範囲を広げれば、こうした痕跡はさらに発見されることだろう。以上から、『無情』の前半が国漢文で書かれてハングル文に変更され、後半は最初からハングル文で書かれたと見なして差し支えないと思う。前半と後半の描写の文体に大きな違いが見られないことは、李光洙が『無情』の前半においてすでに近代的な文体を確立していたことを示す。しかし後半に見られるようなみごとな描写文は、おそらく国漢文で書いていたら生まれなかったのではないかと思われる。表記は文体を近代化させたのである。

では『無情』の表記を変えることを決めたのは誰なのだろう。一九一六年の冬休みが近づいたころに連載依頼を受けた李光洙は、書きためた原稿をもとにして一気に約七〇回分の原稿を書き、新聞社に送った。『毎日申報』に四回目の広告が出た一二月二九日にその原稿が届いていたとすれば、国漢文小説を予告する内容から見てそれは国漢文の原稿であり、そのあと李光洙から変更依頼の手紙が届いたか、現場責任者の中村健太郎が変更の断を下したことになる。原稿到着が二九日以後だった場合は、ハングル原稿が届いた可能性(非常に低い)と、国漢文原稿が届いたが中村が変更した可能性、あるいは国漢文原稿に李光洙の表記変更依頼の手紙が同封されていた可能性も残る。筆者としては中村が変更した蓋然性が高いと考えているが、資料が残されていない以上事実を知ることは不可能である。そもそもそれは大きな問題ではない。重要なのは、この小説を書く過程で李光洙が近代的な文体を確立したことである。金允植は、『無情』は韓国文学史にとって記念碑的な作品であるだけでなく、李光洙のすべての文字行為においての記念碑的な作品であると書いたが²⁴、韓国文学の近代的文体与李光洙個人の文体の確立という面でも『無情』は記念碑的な作品だったのである。

²⁴ 金允植『改訂・増補 李光洙와 그의時代 1』奎、一九九九、五六六頁